

婚約破棄をされた

悪役令嬢は、すべてを見捨てることにした

The Villain Mademoiselle decided to forsake everything.



【著】

アルト

AUTHOR: ALTO

【イラスト】

タムラヨウ

魔王

非道を尽くす魔族の王。
強大な敵として
人類の前に
立ちはたかる。

アウグレーン

ツェレアの父。
王家の命に従い、
娘の追放に
加担した。

ドラグナード王

ドラグナード王国を治める男。
権力を振りかざし、
傍若無人を
極める。

ガゼル

ドラグナード王国の王太子。
ツェレアの元婚約者で、
追放を謀った
張本人。

ラナー

女神。
ツェレアの境遇に
同情し、陰から復讐を
後押しする。

ツェレア

元貴族令嬢。
無実の罪で国を追放された後、
7年間「魔の森」で
復讐の機会を
窺っていた。

登場人物 紹介

こんやくはきをされた
あくやくれいじょうはすべてを
みすでることにした

夢を、見ていた。

一人の女性は、夢を見ていた。

1

——その日は、白銀色に染まる雪の日だった。しかしその日、私の心に刻み込まれたのは、決して、詩人が言葉を尽くして賛美したであろう風景ではない。目に映る光景は、腐敗した貴族の笑顔。偽善者の笑い声。蔑む、視線。そんな、酷いものばかりであった。

「——はっ、はっ……、はっ……」

走って、走って、走って。

日が暮れても、夜が更けても、朝を迎えても私は走り続けていた。
思い返すたびに私の脳内で何度となく木霊する忌々しい笑い声。

たった一つ。

ある貴族の殺人に関与したという偽りの事実一つで、私の人生は百八十度変わった。家からは追
い出され、人里に向かえば罵倒が飛んでくる。

私は必死に弁明した。それは嘘であると。決して私はそんな事はしていないと。なのに誰も信じ
てくれない。

家族ですら、一人も信じてくれなかった。

それどころか、一族の恥さらしなどと怒声を浴びせられ、思い切り殴られた。

そして腫れた私の顔を見た連中から、笑い声が上がった。その記憶だけは忘れたくても忘れられ
ない。

「も、う、誰の顔も見たくない……ッ」

みんな敵だ。

誰も彼も、例外なく人間は私の敵だ。

何処にも拠り所などない。こんな生から逃げてしまいたい。そう思ったけれど、私が死んだとこ
ろで世界は何も変わらない。

何処かで笑い声が一つ増えるだけだ。

だから私は、どんなに醜くても無様でもいいから生き延びてみせようと思い直した。それだけが、
今の私にとっての生きる理由だった。

「だ、から——っ！」

こんな私は人里には住めない。

ならば自ずと私が向かえる場所に限られてくる。

例えば、魔物が数多く棲みついた魔窟——『魔の森』など。そんな誰も向かおうとはしない場所。
だから私はそこへ向かう事にした。

幸い私は、貴族令嬢として高名な魔法師より教えを受けた身。多少の魔物なら対処が出来る。

そう思い、私——ツエレア・ベイセストが『魔の森』へ向かったのが、丁度今から七年前の話で
あった。

2

コンコンとノックの音が鳴る。

ドア越しに、音が響いていた。

「……………」

部屋に木霊する音を無視しつつ、夢から覚めた私は無言で上体を起こし、己の右腕がある筈であつた場所に目を向ける。今は空虚に袖が垂れ下がるだけの場所へ。

徐々に視線を向けた理由は、疼くからだつた。

既に失つた筈の右腕がいやに疼く。

ずきん、ずきんと、一定間隔で脳に痛みを伝えてくる。忘れるな。決して忘れるな。と私に言い聞かせるように――。

「……忘れないよ。忘れる筈が、ないでしょ」

ギシギシと音が鳴る。

全身の筋肉が、密集する刃のようにギシギシと軋む。緊張でもしてしまっているのか、私の身体は力んでいた。

ドアをノックするだなんて慣習は『人間』特有のものだ。

私――ツエレア・バイセストにとって『人間』とは敵。私を見捨てた奴らだ。嘲笑つた奴らだ。貶めた奴らだ。

心の中で蠢くその想いだけで私は生きていた。

その憎悪だけが私を突き動かし続けた。腕を失おうとも、居場所を追われようとも、生き続けて

きた理由。だから、私は敵視する。

何が起ころうとすぐさま対応出来るように、臨戦態勢を整えた。

「大丈夫……大丈夫だから」

己に言い聞かせるように呟く。

もし扉の向こうの存在が真に人間であるならば、私は約七年ぶりに人間と出会う事となる。

どんな用件なのか、見当はついている。

追われ、虐げられ、嘲笑われ――。

そんな負の記憶が去来し、口の端がぐにやりと歪む。そして、

「うん。何も問題ない」

私は顔から感情を、まるで能面に近づけるかのように消し去った。

たとえ追手が来たのだとしても、私はこの七年間、遊んでいたわけではない。

初めこそ、慢心はあつた。けれど、その慢心のせいで右腕を失い、それからというもの、日々を生き延びる事にのみ力を注ぎ延命を続けた。

その事実こそが私の唯一の拠り所。

そんな事を考えていると、ずっと鳴り響いていたノックの音がピタリと止まる。

今は無人であると判断して帰るのかと思いきや、ギイッと音を立ててドアノブが捻られていく。

——随分と行儀の悪い輩だ。

無人であるからとドアを押し開けようとするなど、マナーの欠片もない。ドアの向こうの存在に對して侮蔑の感情を向けると同時、「おい、開いてるぞ」だなんて驚いた声が上がった。

そして、数秒を経て訪問者の姿があらわになる。

「……つか、こんな森の奥に一軒家とは……随分と変わった人もいるんだな」

「本当にね。というか、神託とはいえ何で私達がこんな場所まで迎えに来なきゃいけないのよ……しんど」

「……………」

相貌に幼さを残した少年が一人。

何処か気怠げな印象を受ける少女が一人。

黙り込んだまま気まずそうに目を伏せる、彼らの使用人らしき人物が一人。その後ろに、ずらりと二十人ほどの騎士が控えていた。

その現実を目にした私は、側に置いてあった無骨な剣を無造作に掴み取る。

「わっ、待って待って！ 俺達はあるたの敵じゃないんだよ!! 神託を受けてあんたを訪ねただけなんだ!!」

この辛うじて一軒家と呼べる拠点を捨ててしまいか、それとも守り抜くか。

そんな取捨選択を始めていた私に向けて、少年は慌てた様子でそう言った。

「……神託ねえ」

ここで初めて私は口を開いた。

どうして居留守を使っただとか、彼らには言いたい事がいっぱいあっただろう。

しかし、姿を見せるや否や敵意を剥き出しにした私に向かって、それを指摘するほど肝っ玉は太くなかったのか、私が興味を見せた「神託」について説明を始める。

「そ、そう！ 神託！ あんたも知ってるだろ？ 魔王の悪逆非道さは。その魔王を討伐する為に神託が降りたんだよ。そしてその討伐パーティにあんたが選ばれた。だから俺達と共に——」

成る程。俺達と共に、という事は、この少年もその神託とやらで選ばれた人間なのだろう。女神から選ばれた人間。さしずめ勇者とでも言ったところか。

「それは私の知った事じゃない」

私はぼつさりと切り捨てる。

「神託とか、魔王とか。私はどうでもいい。そもそも私は人間が大嫌いだしね。私としては滅べばいいと思ってるくらいだし」

「……何言ってるの貴女？」

気怠げにしていた少女が話に割り込んでくる。この子も勇者だろうか。

頭がおかしいんじゃないのと言わんばかりに、彼女は視線に侮蔑を込めていた。

嗚呼、その視線だよ。

その視線が、堪らないくらいに腹が立つ。心の奥底で蓋をしていた筈の黒い感情が湧き上がってくる。剣を握る手に、自然と力がこもる。

「……今日は何もなかった。そういう事にしてあげるから、早く私の前から消えて貰えないかな。そろそろ抑えが利かなくなるんだけど」

人間とは、私にとっての敵。

害悪であり、害意を向けるべき対象。

己の中に刻まれたその感情だけは覆しようがなかった。だから、そう忠告したのに、

「……ツエレア・ベイスエスト殿」

黙り込んでいた使用人らしき男が、一枚の書状を懷から取り出しながら私の名を呼ぶ。

しかも、七年前に追い出された筈の生家の家名付きで。

「召集命令がかかっております。ご同行頂けますでしょうか」

「ふ、ふふつ、ふふふふはっ」

その言葉を耳にした時、私の中の何かが弾けた。

「私、勘当されてると思うんだけど？」

可笑しくて仕方がないとばかりに笑い、私は言う。

「……ベイスエスト卿は貴女を勘当した覚えはないと言っておられました」

「ふうん、だから貴族として国からの召集命令に従えと？ 拒めば後ろで控える騎士達で取り押さ

える。そんなところ？ ふ、ふふつ、ふふふふふつ」

身体を震わせながら私は笑い続ける。

貴族としての地位を追われ、笑い者にされ、相手の都合だけで虐げられた挙句、爪弾きにされた私が、どうして神託などという人間の都合に従うと思うのだろうか。

……いや、思わないからこそその後ろの騎士達、か。

「ふざけるなよお前ら」

突として、私は腹の底から冷えた声を上げた。

「……何が、でしょうか」

冷たい視線を向け続ける私に対し、印が押された召集令状とやらをこれ見よがしに掲げる男は、眉をひそめて疑問符を浮かべる。

私が従わない事が、そんなに不思議なのだろうか。それとも目の前の男は、私が受けた仕打ちの事を知らないのだろうか。

「何がじゃない。貴方の発言全てがふざけてるって言ってんの。召集命令？ 貴族？ 神託？ そ

んなものの如きで、なんで私が協力しなきゃいけないの？」

「……陛下の命に背くと言うならば、此方も相応の対応をしなければなりません」

そう言つて男は、隣にいる少年少女と、背後で控えている騎士達に視線をやる。腰に下げた剣の柄を少し持ち上げて刃を覗かせたのは、冗談ではないという表明か。

これは彼なりの脅しなのだろう。

しかし、しかしだ。

「それ、本気で言ってる？」

目一杯の嘲笑を込めた私の返事に、相手の表情が不快そうに歪むがそんな事は関係ない。

「……此処、『魔の森』じゃ、欲しいものは奪う。それが唯一とも言えるルール」

人という存在が私以外ないからこそ、本来の自然界のルールがそのままに続く場所。

それが『魔の森』。

私自身も餌として認識された事は数知れず、そのせいで右腕を失っている。そして私も、生き延びる為に何度も殺しをして、今の今まで命を承らえてきた。

「だから、どうしても私を連れて行きたいのなら、手足を斬り落として連れて行けばいい……つて本当は言いたいところだけだね。ある条件を呑んでくれるのなら協力してもいいよ」

「条件、ですか」

「そう、条件。別に無理難題を押し付けるわけじゃない」

どろりと腹の奥で渦巻く感情を引き上げながら、私は酷く歪んだ笑みを浮かべる。

「七年前に私を貶めた、私の血族含む貴族連中約五十名。加えて王族五名。そいつらの右腕を斬り落として私の前に持って来てくれれば、協力しない事もないかな。どう？ 簡単でしょ？」

「……っ」

息を呑む音の重奏。

「そんな、事ッ、出来る筈が……ッ!!」

「これでも譲歩した方なんだけど？」

「貴様、何様のつもりだ……!!」

化けの皮が剥がれたのか、男の口調が乱雑なものに変わる。

「私は誠意を見せて欲しいだけだよ。あれだけの事をしておいて協力しろと言うなら、相応の誠意を見せて貰わないと納得出来ない」

散々な事をしてきたにもかかわらず、召集命令？ ふざけるのも大概にしろよと、本音を言えば今すぐにも殴り込みに向かいたかった。

「神託で私が指名されたんでしょ？ たった数十人の右腕で世界が救えちゃうかもしれない。安いと思わない？」

「己の立場を弁えろッ！！！」

「己の立場、ね。婚約者から裏切られ、家族や他の貴族にも、更には関係のないそのらの住人にまで虐げられた人間。それが私。立場を弁えなきゃいけないのなら……私は恨みを向けるべき人間を殺し回ればいいのかな」

少しだけ、聞き役に徹していた少女が驚いていた。恐らく、私の生い立ちについては何も聞かされていなかったのだろう。しかし、私の話し相手の男に驚愕の様子は見受けられない。彼には既知の事実だったと考えるべき。

「……後悔するぞ」

話し合いによる解決は不可能と悟ったのか。

殺気のこもった視線が私に向けられる。

だけど、『魔の森』で過ぐす私にとってそんなものは日常茶飯事。暖簾に腕押しだ。

「後悔？ 私が？ ふ、ふふふは、あははははっ」

喜悅に口角を歪ませる。

そして、ぴたりと笑い声を止め、

「そんな事はある得ないから」

圧を込めてそう言う。

「私を脅すのは自由。話しかけるのも自由。意味をなさない印を見せるのも、偉ぶるのも自由。だけどね」

私への苛立ちを抑えられなかったのか剣の切っ先をこちらに向ける男に、言い放つ。

「お前ら知らないでしょ。私がどんな思いで生きてきたか。どれだけ人間に恨みを抱いているか」
当人でないから分らない。

分かつともしないし、理解する気もない。

にもかかわらず、全てを知った気で話を進めていく。嗚呼、嗚呼、腹が立つ。

ぐちゃぐちゃにして殺してやりたいという衝動が鎌首をもたげる。

「お前らがここに来た経緯は、大方分かるよ」

貴族がどれだけ腐敗した、救いようのない生き物であるかなど、私が誰よりも理解している。だから実際に目で見て、耳で聞いていなくても、私は彼らが何を言われて此処へ赴いたのかが分かつてしまう。

「どうせお前らは、貴族に戻せば私が言う事を聞くとか言われてきたんじゃないの？ それとも、逃げるように生きてきた奴に、逆らう度胸はないとも言われた？ 騎士を引き連れて威圧しておけば問題ないって？ ……ふざけるな」

響く怒号。

出来る限り己を抑えよう、抑えようと試みていた筈なのに、いざ人間を前にするとそんな自制は利かなかった。

まるで身体に熱湯でも注がれたかのように、沸き立つ血潮が私の理性を溶かしていく。

「お前らのせいで私がどれだけ苦しんで、悲しんで生きてきたと思ってんの？ それとも、私のそんな感情は瑣末な事だとか？ ……ああ、そうだった。貴族のお偉方はそんなクソ野郎ばかりだった。あーあ。私っては何を期待してたんだろ。人間は全員救いようのない禽獣でしかないのにさ」

そう言っ、私は天井を仰いだ。

「後ろに控えてる騎士も含めて、さっさと帰りなよ。これ以上、私がお前らに話す事なんて何も無い」

力を込めた事で、左手に握っていた剣の柄が、みしりと悲鳴を上げた。

斬り殺したい。

抑え付けていた殺人衝動の籠が外れかかっている事を感じながら、私は目を閉じる。これ以上見つめていると、本当に斬りかかってしまいそうだった。

人間とは、私を苦しめた連中であり、私の敵。

斬り殺す？ いや、何年も背負ってきた私の苦しみを一瞬で終わらせるなんて耐えられない。

お前らは精々苦しめばいい。ううん、苦しんでくれないと不公平だ。最後の最後まで苦しんで、

己の愚かさを嘔み締めながら死んで、漸く私と対等なんだから。

「……あんた、神託の意味を分かってそんな事言ってるのかよ」

言葉を荒らげて反論していた男ではなく、静観を決めていた少年が言った。

「知らないけど？ というより、知る必要がないと思うけど？」

「なっ……」

驚いた声上がるけど、私にとつては至極当たり前の事で、少年の反応こそが驚きであった。どこにそんな驚愕する要素があったのか、と尋ねたいくらいだ。

「ほら、さっさと出て行つてよ。目障りなんだよ」

そう告げてもやはり、小屋の中に入ってきた三人とも動く気配がない。

——物分かりの悪い奴ら。

などと思っていた折、少しだけ意外な言葉が私の鼓膜を揺らした。

「……欲しいものは、奪う。どうしても連れて行きたいなら手足を斬り落としても。そう言っていたな？」

それは、散々みつともなくわめき散らしていた男の声。

「ふ、ふふ、ふふはっ」

楽しげに私は唇を歪ませる。

彼の言葉に対しての私の答えは、嘲笑であった。

「そう、だね。うん。そうだよ。『魔の森』では、欲しいものは奪って手に入れる。それが是とされる場所」

私は強者だけが得をするその理不尽なルールを、誰より理解していた。故に、そこには一片の容赦も入り込まない。

「そういう事なら……じゃあ、そうだね。私は——右腕を貰おうかな」
とんつ、と私の足下で軽やかな音が鳴る。

緊迫したこの状況に似つかわしくない音色。しかし、その音色が何よりも残酷な事実を彼らに伝えている。

「きえ、た……？」

彼らの視界から、私の姿が一瞬でかき消える。

そして、

「七年間。こっちは死に物狂いで生きてきたんだ」

音すらも置き去りにして、私は平坦な声音で言葉を紡ぐ。

男はこの発言を耳にして漸く背後に回られたのだと知覚し、慌てて向き直ろうとするが、もう遅い。

私は手にしていた剣を後ろへ投げ捨て、男の後頭部を無手になった左手で掴み、そのまま床に思い切り叩きつける。

「趣味程度で剣振ってる奴なんかに負けるわけがないじゃん」

強引にうつ伏せにされた男は苦悶の声を上げていたが、それに構わず私は自分の右足を彼の右腕の付け根へゆっくりと移動させた。

「動けば握り潰す」

一瞬の出来事に何が起ったのか分からず、ぽかんと惚けていた少年と少女に向けて私が言う。

私の左手は未だ男の頭を力強く掴んでいる。

人の頭を握り潰せるわけがない。

そんな事は分かっているだろうに、先程の目にも留まらぬ速攻が彼らの判断能力を著しく低下させているようで、まともに言葉も紡げない。

「見た感じ……お前、結構偉い人だよな」

地面に伏す男はそんな私の質問に対し、むぐぐと唸るだけ。けれど、私は辛うじて喋れる程度には力加減をしているので、単に喋りたくないだけなんだろうと判断し、話を進める。

「私を連れて来いって命令した人に一つ、伝言をお願い出来るかな」

そう言って、私は男の耳元へゆっくりと顔を近づける。

そして、

「四肢ししをもがれて達磨だるまにされなくなったら二度と私に関わるな」

圧をかけてそれだけを告げ、私は顔を離す。

「そう、伝えて貰えるかな」

神託において重要な私という存在が抜ければ、王都の連中は慌てふためくだろうか。

そう思うと少しだけ、胸がすく思いであった。

「でも、それだけじゃ間違いない、ただの脅しって思われる」

どんな些細ささいな事であれ、貴族連中に弱みを見せてはいけない。それを身を以て知っているからこそ、視線が己の右足下へ向かう。

「恨むなら、私から容赦を取り除いてくれた王さまと、その息子と、貴族の方々と……こうして這いつくばる事になった自分の弱さを恨もうね」

私が右の足に力を込めると同時。バキリ、と、骨が纏まとめて砕ける音がいに響いた。

右腕を踏み潰された激痛に身を悶もたえさせ、その痛苦から逃れるように意識を手放した男から視線を外し、驚愕に目を見開く少年少女に向けて一言。

「私を連れて行きたいなら襲い掛かってくれていいよ。ただ、コイツとお揃いになるかもしれないけど」

そう言うや否や、彼らは私から半歩距離を取り、壊れた玩具おもちゃのように忙せわしくかぶりを振る。

「……何も、聞く耳を一切持っていないわけじゃない。コイツには『関わるなって伝える』と言ったけど、それは舐め腐くさった態度を取るならの話。誠意を見せてくれれば、私だって話くらいは聞く」その誠意とは、斬り落とした右腕を私の目の前に持つてくる事である。それを理解しているからか、彼らは何も言う事が出来なかった。

「命令一つ、ただか神託程度で全てが無かった事になると思ったら大間違い。私達の溝みぞは、そんなに浅いもんじゃない」

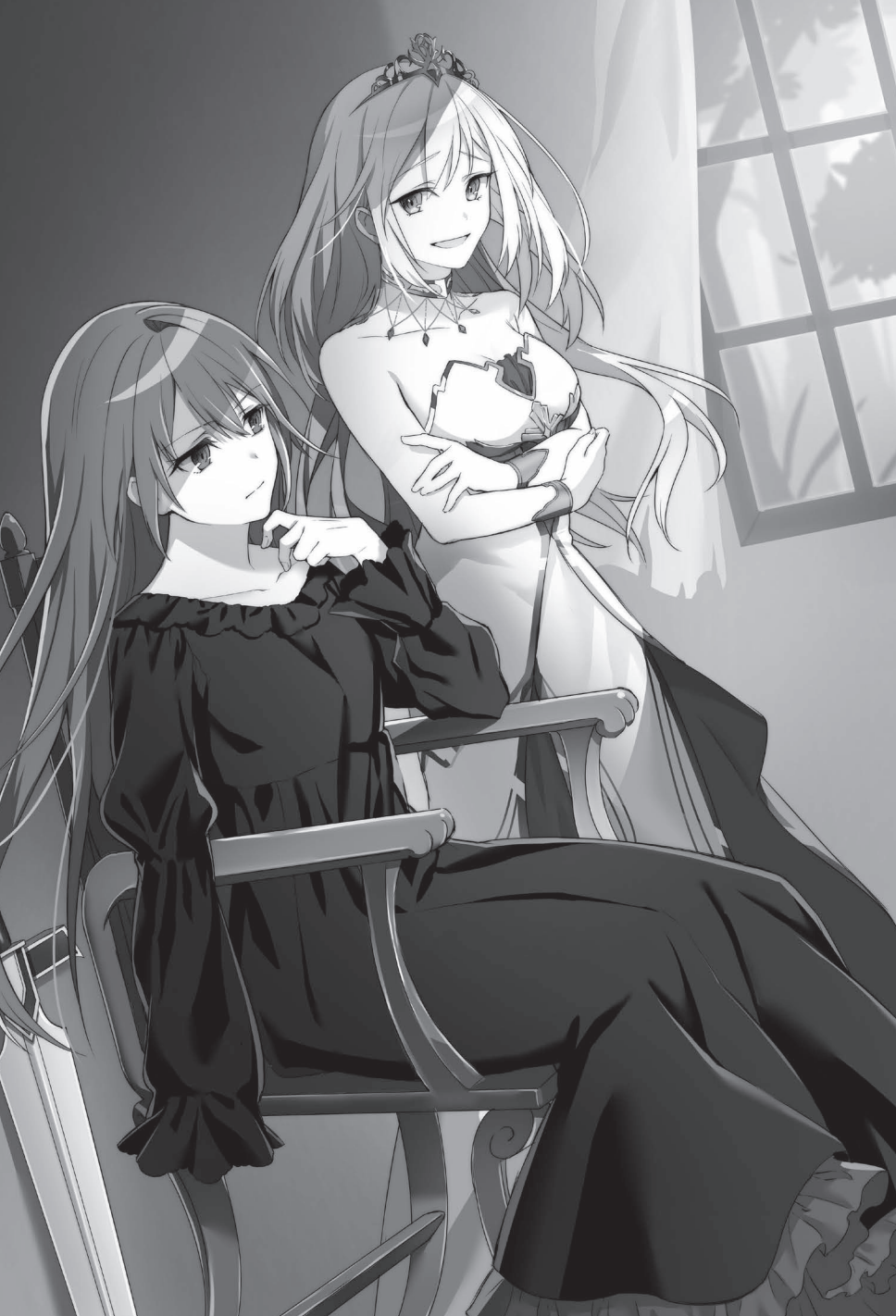
「まるで女優ね……ほんと、いい性格してるわよ貴女」

小屋を訪れた彼らが立ち去ってから数分後。

今度はノックもなしに一人の女性が立ち入ってくる。

「元々貴女が神託で自分を指名してくれて頼み込んできた癖に、抜け抜けと知らないなんて言うんだもの。可笑しくて笑い転げそうだったわ」

「……ラナー」



人形めいた相貌の麗人^{れいじん}。

私がラナーと呼んだその女性は、ずかずかと我が物顔で部屋の奥へと進み、私のすぐ側で立ち止まる。

「なんで殺さなかったの？」

「……あの騎士達の事？」

「それ以外何があるのよ。人間憎しつていつも言ってる貴女がなんで殺さなかったのか気になって仕方がないのよ。だって絶好の機会じゃない……ねえ、どうして殺さなかったの？」

「困るからだよ」

私は刹那^{しゅな}の逡巡^{しゅんじゆん}もなく即答する。

私の友人はこのラナーと、もう一人だけ。

こうして時折会って話している事もあり、彼女は私の考えの大半を知っていると云って間違いない。

ただ、今回の事に関しては、事の全貌をまだ話してはいなかった。故の、疑問。

「神託で選ばれたあの二人の子供に、その付き添い人、騎士二十数名程度。あれを私が皆殺しにして、私憎しで団結されたら困るからだよ」

「……別にいいじゃない。貴女の目的はこの腐り切った世界を壊す事。そうだったじゃない？ そ

れとも、私が知らない間に変わっちゃったかしら？」

「変わってない。人間憎しは一切変わってない」

「だったらなんで——」

そこで、ラナーの言葉が止まる。

その理由はきつと、私が口の端を吊り上げていたから。残酷に、残忍に、冷酷に、酷薄に、円弧を描くように笑みを作っていたから。

自分でも分かる。

今の私はとても醜惡な笑みを浮かべているって。

「ただ斬り殺されて死ぬだなんて、生温いと思わない？」

嗚呼、嗚呼。

どこまでも苦しんで、喘いで、絶望しろよ。

私がそうだったように、お前らも。

これはやり返しなんだ。

誰もが正だと認めるやり返し。

私が味わった痛苦をそのままお返しする。ただそれだけの復讐劇。

斬り殺す？ とんでもない。

そんな優しい事を私がしてやるものか。

「……きつとあの愚王なら、事の次第を一部隠して国民に話すよ。神託で選ばれた人間は国王の召集に従わなかった。その理由は、被害妄想を抱いた罪人だったから、って。私にした行為を全てひた隠しにして、ね」

王の思考が手に取るように分かる。

あの悪意にさらされ続けたからこそ、まるで未来予知でもするかのようになってしまう。

「それからきつと、私という存在など居ても居なくても変わらないと判断する。そして、一行は魔王に挑んで、敗北する。王は言うんだ。負けたのは召集に従わなかった私のせいであると。私憎しで国を纏めようとするけれど、そこで邪魔が入る。それが、魔王による事実暴露」

いつになく気分が高揚している事もあってか、ラナーに言い聞かせているにもかかわらず、早口にまくし立ててしまう。

「魔王は言うんだ。国の貴族が私にした事を全て！ 包み隠さず!! だから協力しなかったのだと！ でも私は言っていた。腕一つ差し出せば手打ちにすると。それを王は拒んだ。そのくらいの罪は受け入れて然るべきであったのに拒んだ！ そして生まれる上層部とその他による不和。後はもう内部から壊れるだけ。いつ復讐されるか分からず、不安に駆られながら過ごして、過ごして、そして殺されるの——私にね」

「……そう上手く事が運ぶかしら」

「運ぶ。間違いないね。それに、今代の魔王は私の数少ない友人だよ？ 理不尽な運命に対する恨みへの理解は、誰よりも深い」

「……まあ、いいわ。貴女が満足するなら私はそれで」

私の想いが聞けて満足したのか、ラナーはそれだけ告げて私の前から立ち去ろうとする。

「……止めないの？」

「貴女は止めて欲しいの？」

「まさか」

それこそあり得ない。

これは、もう決定事項だ。

後戻りするなんて選択肢は存在しない。

「私はただ、『女神』なんて呼ばれてるラナーがこんな計画に加担しても良かったのかって思っただけ」

「私は聞いただけよ。一人の少女の願いを聞いただけ。神託で自分を指名して欲しいという願いを聞いただけ。その結果、人間が減ぼうとも、私の知った話じゃないわよ。『女神』はね、醜惡な人間には手を貸さないの」

「……私も十分醜惡だと思っただけ」

「あら、それは私が判断する事よ。貴女の価値観は私にとってはどうでもいいの。私が醜惡でないと判断した。必要な事実はそれくらいでしょう？」

他者の意見に一切靡かない。

自分の判断こそが全て。

その在り方は、私の好むところであった。

「……ああ、そうよ。もう一つ、貴女に聞きたい事があったの」

「私に答えられる事ならなんでも答えるよ」

「そう。なら、遠慮はしないわ。ねえ、」

少しだけ厳しい視線を向けながら、ラナーが口を開く。こちらの真意を探るような、そんな眼光であった。

いつになく真剣なラナーの様子に、場が少しだけ張り詰めてしまう。

「どうして私には名乗ってくれないのかしら」

その言葉に、私は小さく笑みをこぼす。

「名は、捨てたから。ただそれだけだよ」

ツエレア・ベイセストという名は捨てている。

だからこそ、今の私は名も無き人間。
名も無き人間に、失うものは何も無い。

……とは言っても、私がツエレア・ベイセストという事実に変わりはなく、その名で呼ばれれば、神託がどうのこうのと言っていた連中にしたように、反応してしまう。

きつと、ラナーがどうして名乗ってくれないのかと言ったわけはそこに収束するのだろう。

「……本当に、それだけかしらね？」

数少ない友人に、隠し事をするべきではないのだろう。だけど私は「そうだよ」と言って首を縦に振り、肯定した。

見せるべきではないのだ。

たとえ友人相手であっても、この淀み過ぎた感情だけは。

口で「殺す」と叫ぶのと、これは全くの別物だ。名を呼ばれたその瞬間、胸の奥から湧き上がるどす黒い感情が全身に絡みつき、容赦のない敵意と殺意が否応なく発露する。

今こうして私が比較的平静を保っているのも、ツエレア・ベイセストと現在の私を別物として考えているからに他ならない。

過去の、名があつた頃の私は、よく嘔吐していた。

涙が溢れ、苦痛に囚われ、孤独に喘いでいた。

痛みに声を上げれば、『魔の森』に棲まう魔獣共が餌を見つけたと飲み集まる。

だから私はひたすら感情を押し隠すしか出来なかった。誰が悪かったのだと、毎日、毎日、毎日——毎日自問して。

理不尽過ぎる事実を自答する。弱者である私が悪いのだと。

ツエレア・ベイセストだった何かが、ぼろぼろと崩れ落ち始めたのも、丁度あの頃。

私の中に生まれ、蠢いて、染み込んだ感情が鎌首をもたげながら、令嬢時代から残る人間らしさの全てを壊し尽くした。

そして私は、名無しになったのだ。

荒れ狂う想いを閉じ込めるように、ツエレア・ベイセストというかつての名を捨てたのだ。

「……前の名前は捨てた。本当に、ただそれだけだよラナー」

念を押すように再度言う。

「……そう」

彼女はどうか、少しだけ悲しそうで。

けれど、私がそう言うのと分かつていたのか、その表情に落胆の色は薄かった。

せめて、数少ない友人にだけは。この醜い感情を、狂気を、人間として致命的なまでに壊れ切った憤懣と憎悪を、見せたくはなかった。

だから、そのトリガーとなるツエレア・ベイセストという名を呼んで欲しくない。

言葉の裏に隠されたその想いを感じ取ってくれたのか、ラナーがこれ以上私の名前に言及する事はなかった。

「何もかも捨ててしまった方がいいんだよ。人間らしさも、何もかも全て。失うモノをゼロにしてしまった方が、私にとつてはどこまでも都合が良い」

憚られるものがなければ、何だつて出来る。

だから私は――。

「まあ、貴女の人生だもの。どんな生き方をしようが、貴女の自由。私がとやかく言う権利なんて何処にもないわ」

そう言つてラナーは、もう聞く事はないとばかりにドアノブに手を掛け、押し開ける。

「また、寄らせて貰うわね」

ラナーが小屋から立ち去る直前。

びゅう、と一陣の風が吹いた。

そのせいで、小声でひとりごちた彼女の言葉の全てが、私の耳に届く事はなかった。

――ねえ、気付いてる？

辛うじて、風に邪魔をされながらも聞こえたのはそこまで。

でも私には、彼女がこう続けたのが分かった。
貴女のその私を氣遣う態度。それがとっても人間らしいって事を――。

3

「新聞ちょうだい」

平坦な声でそう口にする私の頭上には、少し大きめのポーチを首から下げている鳥が一羽。

左の手を高く上げると、その鳥は首に下げたポーチから新聞を一部、こちらに落下させる。

そして私は落ちてきた新聞を手に取り、記事に視線を落とした。

「……概ね予想通り、ね」

あの鳥は、号外が発行された際に飛ばされる一種の配達屋。

先程のように、求めれば誰にだろうと新聞を落とす役割を担っている。

号外が出たという時点で粗方の事は想像がついていたが、こうも予想通りに事が運べば、私が口の端を吊り上げるのも仕方ないだろう。

「神託で選ばれた勇者三人と二十余名を連れて、最西端に位置する街――ドラフブルグにて暴れていた魔族を鎮圧。王都はその祝勝パレードでお祭り騒ぎ。このまま魔王討伐に動く、か」

私に関しては恐らく、現状では無視する方針に決まったのだろう。

私を強引に捕らえようとすれば少なからず被害が出ると、神託にて選ばれた勇者二人と腕を折つてやった男が言ってくれたのかもしれない。

そもそも、敵意をむき出しにして対応したのも、私に構えば被害が出るぞと理解してもらう為。このタイミングで私を放っておいてくれないと何もかもがお釈迦しゃかになってしまうからだ。

「ただ——」

出だしは私が描いた通りに進んでいると言っている。いいのだが、勇者三人というのが引つかった。

ラナーが下した神託では、勇者は私の他に二人だけ。

それなのに、記事では一人多い事になっている。

だとすれば、

「代役……かな」

私の代わりに誰かが勇者に選ばれた。

予定にはない事だが、その程度で何年も前から描いてきたストーリーを変更するつもりはない。それに。

「支障が出るようなら最悪、私の手で」

——殺せばいいのだから。

そう、決意する。

この復讐は、あの時私を見捨てた人間に対するもの。あの時貰った全てを返す為だけの復讐劇。誰一人として信用出来ない状況を作り出し、襲い来る理不尽に身を震えさせる為だけに描かれたもの。

私だけ我慢しろ？

そんな事は許されないし、私が許さない。

とある聖人の言葉が脳裏のうりを過るよぎ。

我意を胸の内に留める事こそが、その者の強さであると。だけど私は違う。

それが是とされる世界だというならば、私は弱者でいい。恨みを果たせるのならば、私は何にでもなつてやるよ。

それが私の願いなのだから。

私の全てはその復讐だけに、愚直に、ひたむきに、注がれ続けてきたのだから——!!

どこまでも澄んだ淡青たんせいの空。

蝶よ花よと育てられていた頃は一度も目にする事のない日もあったというのに、復讐に心血を注

ぐようになってからはすっかり見慣れてしまった。その広大な空を仰ぎ、私は破顔する。

「何が起ころうと、これだけは変わらない。これだけは、変えられない」
静謐に。

それでいて何処か、苛烈に。激烈に。

私は感情を込めて言葉を紡いでいく。

「だから、」

誓いを此処に。

決意を此処に。

想いを、此処に――。

「たとえなんと言われようとも、貫くよ」

確固たる意志として私の中に根付いてしまった願い。

「私の正義が、悪であつたとしても」

罪悪感は生まれない。

後悔も生まれない。

「もう、誰にも止められない」

殺しに対して。

害を与える事に対して、私が罪悪感を抱く事なぞあり得ない。

「だから私はコレを成し遂げよう。コレを貫こう。コレを、果たそう」
全ては、この日の為だけに。

描いたシナリオを現実にする為に。

その障害になつたであろうモノはもう既に、

「――名も無き私に、失うモノは何も無いのだから」

薄れて消えたのだから。

これが、ラナーと別れてから十日後の出来事であつた。

4

「ゴールド将軍が勇者に……、そうか」

寂れた廃城にて、一人の男が異形の生物より伝えられた言葉を反芻しながら、空を仰ぐ。そこには茜と黒が歪に混ざり合つた夜の色が、遙か遠くまで広がっていた。

「――」

男にしか分かり得ないであろう言語で、異形の伝令役は言う。

良いのですか、と。

「ああ、良いさ。問題ない。元よりアイツは死に場を求めていた。俺が助ける事をアイツは求めていなかった。気持ちを汲んでやるのも、『王』の役目だろう？」

「――」
伝令役は慌てて平伏し、ガタガタと僅かに身体を震わせながら男の言葉を待つ。

差し出がましい事を口にしてしまい、申し訳ありません。そんな言葉を添えながら、判決を待つ罪人のように怯えるだけ。

しかし、

「良い。頭を上げろ」

やってきた言葉は、赦し、であった。

「お前は、魔族に生まれてまだ目が浅い。故に許そう。ゴールド將軍や古株の連中の気持ちは、気が遠くなるほど生きて漸く理解に届く。そんなものなのだから」

伝令役は不思議そうに首を傾げた。

「お前は、人が死ねばどうなるか。その答えを知っているか？」

その問いに対して、伝令役はいえと首を振る。

「だろうな。それを理解していた連中は、俺を含め十人にも満たないのだから」

少しだけ、悲しそうに。

寂寞を漂わせながら男は言葉を続けた。

「人が死ねば、魂というものが骸から生まれ出る。その際に、黄泉へ送られる魂から、不必要とされた不純物だけが取り除かれる。それを俺は『遺志』と呼んでいる」

伝令役は聞き入っていた。

男の言葉に、話す内容に。

「黄泉とは罪無き魂が落ちる場所よ。穢れを抱いたまま彼処へ向かう事は出来ない。だから、その前に穢れを落とすのだ。その行為により、『遺志』が生まれる。言うなれば、それは怨念に近い」

「――」
怨念ですか、と伝令役は言う。聞き慣れない言葉であったのか、その表情には一層深い疑問が刻み込まれた。

「ああ、怨念だ……そして、魂から穢れとして取り除かれ、行き場を失った『遺志』は、果たして何処へ行くと思う」

そう言って、男は異形の伝令役――魔族と呼ばれる彼を指差した。

「答えはな、魔族の命だ。穢れは新しい生命としてこの地に根を張るのだ」

男の言葉は続く。

「魔族が人を恨み、憎み、殺しに向かう。その理由の全てがそこに帰結するのだ。魂から穢れとして取り除かれた『遺志』というものは、いわば憎悪の塊よ。怨嗟の声すら漏れ出るソレを基として生まれた魔族が、どうして人を憎まずいられようか？　だから、俺達魔族は人間を恨み続けているのだ」

「――」
真摯な眼差しを男に向けながら、伝令役の魔族が言う。ならばどうして、仇討ちに行こうとしないのか。それも冷静でいられるのか。

人間とは、憎むべき対象ではなかったのか、と。

「お前の言葉はもつともだ。だがな、長く生きていれば嫌でも理解する。俺達の恨みには、限界があるんだ」

それこそが、今回勇者によって魔族の一人――魔将軍ゴールドを失ったというのに、男が動揺を見せるどころか、言葉一つで受け入れた理由であった。

「俺達魔族の恨みは、魂より取り除かれた穢れ分の恨みを返せば終わってしまう。中身の失われた器だけの存在になってしまう。だから、長く生きれば生きるだけ、空虚になる。そして、死を求める。だから俺は、ゴールドを送り出した」

「――」

成る程と、伝令役が神妙に頷く。

そして、今度は彼が質問をした。

「――」

では、貴方様があの人間を助ける理由は何でしょうか、と。

「何を当たり前の事を聞く」

男は面白可笑しそうに笑いながら言う。

「姿形など些細な事でしかないだろう？　元より魔族自体が、真に何者であるか曖昧な存在なのだから」

人間の一部分なのか。

はたまた、魔族という別の存在なのか。その真偽を判断出来るものは何処にも居やしない。ならば、

「判断材料など、境遇や心しかあり得まい？　不服ならばアイツの心に問えばいい。さすれば分かるだろうよ。アイツが、俺達の同胞である、とな」

「――」

それが、あの人間を助ける理由ですか、と伝令役は厳しい表情で今一度問いかける。

それに対する男の答えは――破顔であった。

「不服か？」

言葉に乗せられた庄に身を竦すくませながら、伝令役の魔族は首を左右に振る。

そもそも、伝令役の彼ごときに、男の言葉に反論する権利なぞありはしない。

にもかかわらず、こうしてさも対等であるかのように問答もんどうをしていた。それこそが異常なのだが、当の男には全く気にかける様子が見受けられない。

伝令役は言う。

「――」

不服なわけがありません。

――魔王様、と。

「そうか」

本来ならば、そこで話は終わる筈だった。

魔王と呼ばれた男が、その受け答えをしたところで、終わる筈だった。

しかし、異形の魔族がもう一つだけ質問を付け足した事により、話は終わらなかった。

「――」

どうして魔王様は、あの人間に執着するのですか、と。

「執着、執着か。お前には俺が執着しているように見えたか」

内容を吟味ぎんみするように言葉を反芻し、確かめる。そして相好そうこうを崩し、面白可笑しそうに尋ね返した。

その返答は、小さな首肯しゅけんひとつ。

「変なところに気付くのだな」

魔王と呼ばれた男は別段、怒る事もなくそう言って、伝令役の男を彼なりに褒めてみせた。

「執着、とはまた言い得て妙な言葉だ。確かに俺はあの人間しょうにんに執着しているのだろう。お前に言われずとも、薄々ではあったがその自覚はあった」

「――」

ならば尚更、どうしてなのですかと伝令役は言う。

「お前は少し、遠慮という言葉を覚えた方が良いな」

魔王は苦笑いを浮かべながら、優しい言葉で咎める。

すると伝令役は平伏し、すぐさま申し訳ありませんと許しを乞うた。

「まあ良い……理由、だったな。俺が人間しょうにんを気にかける、その理由」

少しだけ悩むそぶりを見せる魔王。

そして眉根を寄せ、瞑目めいもく。

「昔の俺と重なったから、なのかもな」

様々な感情が込められたであろうその言葉を魔王が口にした時、閉じられていた目蓋^{まがた}は既に開かれていた。

「……………」

意味深な言葉だったが、今度は何故なのですかと問う声は聞こえてこない。

それはきつと、遠慮を知れという先程の忠告に留意しているからなのだろう。

殊勝な奴……。

などと思いつながらも、魔王は少しだけ意地悪な問い掛けをする。

「質問を、しなくても良いのか？」

口角がほんの僅かに喜悦に歪んでいたのは、ご愛嬌^{あいさよう}といったところか。
しかし、伝令役は縦に一度首を振るだけ。

「そうか……ま、あまり知り過ぎるものでもない、か」

魔王はそんな彼の選択を尊重し、表情に薄らと貼り付けていた意地の悪い笑みを消してから一言。
「伝令ご苦労だった。もう下がって良いぞ」

それを聞き、平伏したままの状態を貫いていた伝令役は頭を上げる。そしてゆっくりとその場から離れて行った。

「なあ、ツエレア・バイセスト」

魔王は名を呼ぶ。

この場にいない一人の少女の名を、物憂げ^{もののう}に。

「人間とはどうしてこうも、醜い^{みにく}のだらうな」

寂しげに、言う。

そこには何故か、自嘲^{じちよう}が込められていた。

自責が混じり込んでいた。

5

風が、吹く。

まるでこれから何かが起こるぞと言わんばかりに、無風であつた筈の場所に、ゴウと音を立てて強風が吹き込み、私の身体を打ち据える。

「——今日は外にいたのね」

声が聞こえた。

それは、ここ数年ですっかり聞き慣れた友人の声。民草から女神と呼ばれるラナーである。

まるで転移でもしてきたかのように突然現れた彼女であったが、外にいる時は決まってこの登場

の仕方なので、既に私は慣れてしまっていた。

だから、微塵^{みじん}も驚く事はない。

「今日はどうしたの？」

「始まったから、教えてあげようと思って」

「魔王と勇者の戦いが？」

「……それ以外に何があるのよ」

ラナーが呆れる。

そりゃそうだ。私だってそれ以外に心当たりはない。

「じきに、此処へ兵士が殺到するわよ」

——貴女の未来予想図通りに、ね。

ラナーもラナーで、勇者と魔王が衝突すれば、万が一にも勇者に勝ち目は無いと捉えているらしい。それは女神としてどうなんだと言ってやりたくもあつたけれど、彼女がこういう性格だと今までの付き合いから理解していた為、私が言葉にする事はない。

「知ってる」

他に責任を押し付けるしか能の無い愚王と王侯貴族共の性格からすれば、魔王に負けた責任の向かいどころは、神託を断った私の元しかあり得ない。

「大軍で押し寄せられたら貴女も無事では済まないでしょう」

此度の魔王との戦闘。その戦犯として選ばれるのだから、騎士団一個中隊が此処に押し寄せても不思議ではないと。

ラナーは言外に言ってみせるが、当の本人たる私は何の危機感も抱いてはいなかった。

「それとも、あの外れ切つた魔王にでも守ってもらう予定だったのかしら」

ラナーはしばしば魔王の事を『外れた存在』であると評す。それは決して道を外れているという意味ではない。

女神と称えられる彼女の目から見ても、生き物として存在が外れ過ぎているという意味からくるものであった。

あの魔王は、如何なる戦場だろうが生き残ってみせる。それだけの武と知を持ち、生き物としての枠組みから外れ切っている。最早意思を持った災厄^{さいやく}とさえ言えた。

「そんなわけないよ」

私も魔王の規格外ぶりは分かる。現に、今も頼ってしまっているぐらいだ。だけど私は彼女の言葉を否定する。

何故ならば、

「そもそもこれは、私の復讐。私の為の、復讐なんだよ」

私の中で、不撓不屈の何かが轟々と燃え上がる。どこまでもそれは——燃え盛る。

「手を借りるのは一度だけと決めてる。何もかもを頼れば、それは私の復讐じゃなくなってしまう。だから、その選択肢はあり得ない」

「じゃあどうするのよ？」

「そんなもの、決まってる」

風の音だけが響く寂然とした世界。

妙に心地の好い静寂に身を委ねる私は、スウと息を吸い込み、満を持して言う。

そこで、ピタリと風はやんだ。

「……私が、この手で終わらせる」

その言葉に、ラナーは頬を僅かに引き攣らせていた。

私は全身から覚悟という名の圧を放ち、世界を揺るがす。

「きつと向こうは、私は殺せない人間だと思い込んでる」

当たり前だ。

殺せるタイミングで私は誰一人殺さなかったのだから。その事実があるから、彼らは私を侮っているだろう。そこに、つけ込む隙がある。

「本当の戦渦はここからなんだよ、ラナーッ！！！」

私は叫ぶ。

万感の思いを込めて叫び散らす。

「その為の七年だ。その為に、私は生きてきた」

何度も言うようだけど、私にはそれしかないんだよ。そう彼女の心に刻みつけんと、私は同じセリフを口にする。

「主役は私だよ。だったら、私が動かないでどうするの。私が他の誰かに頼り切りでどうするの。

そうは思わない？　ねえ、ラナー」

6

「——勇者が魔王に敗北しただとッ!？」

王の怒号が飛ぶ。

ふざけるなという憤懣がこれでもかと込められた叫び声。それに気圧されたのか、「勇者一行が魔王に敗北し、命からがら逃げ果せた」という報告をした伝令役は、ガタガタと身体を恐怖に震わせていた。

「……お主、それが何を意味するのか、分かっておきながらの言葉であると捉えて良いのだな？」

悪逆非道な行爲を繰り返す魔王を排除し、太平の世を取り戻す。

此度の魔王討伐は、そのような名目を掲げての行爲であった。

しかし、その裏には政治的駆け引きも存在しており、国王の嫡子である王太子が恙なく王位を継承する為の実績として扱うつもりだったのだ。

他国は勿論、自国に対しても、「王太子は王としての資質に問題なし」と知らしめる為の魔王討伐。それが失敗したと成れば――。

「わ、分かっております!! ですが、此度の魔王討伐は殿下に問題はなかったのです!!」

他の要因があつて魔王討伐を成せなかったのだと言つて、伝令役は保身に走る。

「女神からの神託では勇者は三人選ばれていました……しかし、実際に向かったのは二人だけ。人数合わせとして腕利きを一人連れてはいましたが……やはりそこに要因があつたのでしょうか」

「ほう? 続けよ」

「はっ。ですので、此度の討伐失敗の責は殿下にはありません。誉れ高き勇者という役目を負いながらもその任を放棄したあの女にあるのです」

「ツェレア・ベイセスト、か。ならばどうする?」

「あの女の首を以て、今回の討伐の失敗については納得して貰う他ないでしょう。民衆の前で、彼らが納得出来るだけの理由を並べ立てた上で斬首に処す。その理由がたとえ根拠のないものであつ

たとしても問題はありません。何せ幸いにも、ツェレア・ベイセストといえは悪業ばかりの毒婦ですから」

これ以上ないほどに都合の良い存在ではありませんか。と笑みを深める使者に呼応するように、王も頬を緩める。

「よからう。そこまで言うのなら、その通りに事を収めろと他の者にも伝えるが良い」

「ははっ。ありがたき幸せ」

それだけを告げ、使者の男はその場を後にしようとする。

そこへ、王は忘れていたとばかりにもう一言、男に投げかけた。

「ツェレア・ベイセストは以前、勧誘を行った際に勇者の側付きを一瞬で無力化したと報告を受けたが……」

「ご心配には及びません。今回、ツェレア・ベイセストの身柄確保には王国直属の騎士団一個中隊を派遣いたします。殿下の評判を二度も汚した悪女を裁く為と言うと、彼らも二つ返事で頷いてくれましたよ」

「ほうほう! そうかそうか。万事抜かりないと言うのなら、我から言う事は何も無い。良い報告を待っておるぞ――」